

「法華和讃」の本文について

武 石 彰 夫

日蓮聖人作と伝えられる「法華和讃」の本文は最近の成果である「昭和定本日蓮人遺文」續篇第二輯「著述・消息」にして眞僞の問題の存するもの、其の他」に收められているが、眞蹟、古寫本の類は存在していない。「録外」の最初の集大成刊本である「録外御書」（寛文二年刊）には收載されているが、「高祖遺文録」（明治十三年刊）にはのせず、これを類聚した「類纂高祖遺文録」（大正三年刊）にも收められていない。一方、先行諸遺文集に除かれた録外他七十六篇を増補した「日蓮聖人御遺文」（明治三十七年刊）には續集としてのせている。

「日本歌謠集成」巻四の本文はごく些細な表記を除いては前記系統に上つたものと思われるが底本を明らかにしていない。又「佛敎和讃全書」の本文もこの系統のものであるが、只、末尾に御詠歌四首、巻頭讚八句を加えている。これとて

「法華和讃」の本文について（武石）

も底本を明らかにせず、資料としての價値を半減するが、凡例には、「余が數年來篋底に藏め置きし古寫本」との編輯子の言がある所から、あるいは貴重な古寫本があつたものかと思測されるが、「法華和讃」については望外の事かと思う。次に注目すべき本文は「昭和重修日蓮聖人遺文全集」（昭和九年平樂寺書店）收載のもので、前系統の本文とは十六句に及ぶ異同が見られるが、これも底本が明らかにされていない。

以上、本文について書誌的に確證が得られぬことを述べたのであるが、次に日蓮聖人作と傳える著作年次について、編年目録である「境妙庵御書目録」（明和七年）には弘安五年、「新撰校正祖書目次」（文化十一年）に建長七年、「新定祖書目錄攷異」（弘化二年）には著述年月不詳としている。建長七年のいえば聖人は鎌倉の地にあり法華一乘の流布を積極的に展開されていた時期であり、弘安五年といえば、聖人入滅の年に當つている。かくの如く、本文についても、著作年次にしても、遺文への收載状況から見ても、極めて安定度が弱いも

「法華和讃」の本文について（武・石）

のと認めざるを得ないのであつて、教團内でも、この和讃に對しての確固たる斷定を缺いていたことを物語るものである。

次に「法華和讃」なる名稱が御書編纂史の中に初出するのは何時頃のことであろうか。録外の最初の集成目録である「朝師御自筆録外御書分」（日意 久遠久遠寺藏）には「法華和讃」は未だ入つてきていないし、それ以前の文獻にもその名

は見えないようである。所が一名「意師目録」と稱される「大聖人御筆目録」（久遠寺藏）においては、「御筆御書注文」と「録外御書注文」とに分け、後者に「日意私所持分」として「法華和讃 重本アリ」と初出するのである。御書編纂史

の説く所を見るに、日意は日朝の仕事を整理し補足したもので、當時は御書集大成への途上にあつたとされる。日意は師の目録に對する權威を慮つてか「私所持分」としてあるよりも考えられる。時あたかも身延の興隆期であり、外に對する内の充實という點からも御書の整備に鋭意盡力した理由が

うかがわれる。このような情勢の中で、具さに探索の業が行はれ「法華和讃」の發見がなされたということは十分有り得ることである。例えば、眞蹟資料の發見から「昭和定本」に

新加され、尙、古資料發見の可能性も存するのであるから、この面から「法華和讃」を抹殺することは輕視の謗を免かれぬであろう。しかし、古寫本の類をも發見できぬということ

から見れば、日意の時代に突如して文獻に初出することに疑

問を持つのも許されてよいと考える。

この後、天正十一年秋、日護が鳴瀧三寶寺における録外編纂の目録「三寶寺録外御書目録」には明らかに「法華和讃」として入り、寛文二年刊の二十五卷二百五十九通の「刊本録外」に收められていくのである。

二

次に本文の内部微證にふれておきたい。

その前に從來の説を述べておくと、高野辰之博士は「日本歌謠集成」卷四の解説において「日蓮の作でないにしても、この宗の碩徳の作であつたことには疑がない」とされて「古讚集」に収録された。多屋頼俊博士は「和讃史概説」に、①内容の弱さ、②「歸命妙法蓮華經」とあること、③「慈尊三會の曉は」以下六句が「梁塵秘抄」法文歌と類似し、「空也和讃」「淨業和讃」中の恩徳讚等にも類似表現が認められる所より、日蓮聖人乃至は高弟の作ではないと斷ぜられた。この③の觀點はさらに深められなければならない。

一 「衆寶瓔珞露をたれ 幡蓋風にひるがへる 多摩羅跋香充滿し 喜見城には花ぞふる」の四句は「梁塵秘抄」法文歌一三二、經歌中の法華經二十八品歌、分別功德品の第三首目に所出する歌謠の、

「釋迦の説法説く場に 幡蓋風に飄へし 多摩羅跋香充ち

満ちて「喜見城より華ぞ降る」と類似することは一見明らかであり、志田延義博士が法文歌の原據を整理されて夙に指摘された所である。この典據は勿論「經」の分別功德品の長行によつたものと思われるが、「法華和讃」はこの法文歌を直接の先蹤としたものであるかどうか。

二 「實に法華の眞文は あふ事うる事かたくして 刹那も此經きく人の ひとりも佛にならぬなし」この表現は、例えば「聲明要略集」所載の訓伽陀「運像末にこえて この眞文を見る 苦徳本をうゑたるに非よりは 實にあひがたしとす」に見られるし、魚山叢書所收の「伽陀集」、金澤文庫の諸伽陀に頻出する所である。

三 「慈尊三會の曉は 五十六億はるかなり その程生死に輪廻して 佛前佛後の衆生は 一乗妙典たもたずば 争でか出離の道をえん」この初頭の二句は金澤文庫本「舍利講伽陀」に見られ、又、この種の發想は他の訓伽陀、和讃、今様、謡曲等にも散見する。従つて構成からいえば、「舍利講伽陀」十「淨業和讃」恩徳讚（釋迦ノ在世ハスギサリヌ 彌勒ノ出世ハハルカナリ 彌陀ノ悲願ヲタノマズバ ワレラガ出離イカガセム）のようにも解せるが、内容からいえば、法文歌と等しく法華信仰に置き換えられている。この意味では法文歌の系統にあるものと思ふが、直接的な影響は指摘し難い。一つの推定を試みれば、「空也和讃」からの發想を受けながら、内

容を法華信仰に轉化した訓伽陀の如きものがあり、これと、又、他の訓伽陀の部分をも取り入れて「法華和讃」に轉成したものと考へられるが斷定はできかねる。

一 について志田博士は、「法華和讃」の成立が確定し難い所から、あるいは先行の和讃によつたものと述べられている。和讃の一節が切り出されて法文歌となつた例もあるが、訓伽陀資料の發想から、和讃↓訓伽陀↓法文歌の系列がさらに確認されるに至つており、この三者に共通する歌謡も見出されている。一方法文歌が中世の和讃に影響を與えている例もないわけではない。親鸞聖人の「三帖和讃」淨土和讃大經意二十五の「彌陀成佛のこのかたは いまに十劫とときたれど塵點久遠劫よりも ひさしき佛とみえたまふ」の發想は、「梁塵秘抄」法文歌巻頭の「釋迦の正覺成ることは 此の度初めと思ひしに 五百塵點劫よりも 彼方に佛と見えたまふ」を考慮に入れる必要があることはこの例である。先行の和讃なり訓伽陀なり、又法文歌を取り入れることは個人の創作という點からも決して否定さるべきことではない。（和歌の世界に本歌取が盛行したことをも想起する必要がある）一の如きは典據をふまえて八瑞相の中四瑞相を歌つたとすれば、必ずしも法文歌のみに限定することはできず、より直接的な訓伽陀なりを推定し得ることも可能であるようにも思う。以上内容の

考察を進める時、一、二、三の徴證を含むからといつて一概に日蓮聖人作を否定するまでには至らないが、反面その述作の豊富さと、比喩を驅使しての内容に密着したすぐれた文體の創造をなし得た祖師の作として見る時、短篇九十二句中に占める三點は解消し難いものと考えられてくる。

三

次につけ加えるべきは、叡山に所傳する「法華和讃」との関係である。この點については從來全くふれられなかつたように思う。叡山文庫藏藥樹院寄託の「法華和讃」は近世中期頃の稿本の類と認められるが、すべて四十六句、「傳日蓮作」の九十二句に對して半量であり、文化十三年宜空寫の滋賀院藏本は前者に十句を増して五十六句である。（南溪藏寶曆三年實靈寫のものも四十六句）この他「昭和現存天台書籍綜合目錄」には寛永寺藏の一本に「この和讃はわが六郷山にては高僧周雲といへる御方の御作……山門にては慧心僧都の御作云云」とのせている。前記、四十六句本には傳教大師作としてあるが、勿論、慧心、周雲と共に附會であることは、「天台霞標」他諸目錄を検するまでもない。注目すべき事は、叡山所傳のものには、二章で述べた一、二の部分を含むこと以外に、相當部分にわたつての本文異同が認められることである。しかしながら、それぞれに十分の獨立性を有する一篇と

思われる。叡山に何等かの形で「法華和讃」なるものが所傳することは當然あつてもよいことであるが、古資料に接し得ない。

とすれば、「法華和讃」に四十六句本、五十六句、また、さらにこれに類する原型があり、これに日蓮の教義を取り入れ、先行歌謠を取り入れて増補したのが九十二句本であろうか。

逆に、「傳日蓮作」の九十二句本を壓縮して天台向に改修したものかどうか。筋からいえば前者の如く考えたいのであるが、確證のない現在結論は下せない。九十二句本も體としては決して新しい時期の製作に屬するものでないことは一見して明らかであつて、佛教歌謠史上十分注目すべき作品と思われる。（紙幅の関係でさらに具體的な考察は「和讃と法文歌」（大東文化大學文學部紀要第二輯）に譲つた）

- 1 以下目錄は「昭和定本日蓮聖人遺文」第三篇所收の「目錄」篇による。
- 2 「日本歌謠圖史」
- 3 「日本歌謠集成」卷四收載
- 4 京都金蓮寺の「和讃」では、この歌謠は「釋迦」の末尾にある。この「和讃」の「恩徳」「釋迦」の部分が「淨業和讃」の本文と異なることは多屋博士が述べられた。「時宗の本作の和讃」——「大谷大學研究年報十四集」
- 5 前記3に同じ
- 6 拙稿「親鸞和讃と法文歌」——「解釋」昭和三十四年十二月、拙稿「三帖和讃の特質」——「文學研究」第十七號（本稿において三帖和讃の形式について法文歌との關係を詳考した）